

補習授業校への巡回指導から見てきたもの

—— 日本人学校との連携と少人数の中でのグループ学習 ——

前上海日本人学校浦東校 教諭

大阪府枚方市立川越小学校 教諭 栗本美香

キーワード：南京補習授業校，日本人学校，連携，グループ学習

1. はじめに

22年度から24年度と在籍していた期間に、上海日本人学校ではグループ学習を取り入れた学びの研究を進めていた。平成22年度、23年度と2年間の南京補習授業校への巡回指導に参加する機会をいただき、日本人学校と補習授業校のような少人数の中でのグループ学習の違いを比較し、どのような違いがあったのかを紹介したい。

2. 南京補習授業校の現状

(1) 指導の対象人数と教員について

年々児童生徒の人数は増加傾向にある。それに伴い、教室数の不足や教員の確保が厳しい状況である。教室の中に複数学年の児童生徒が学習しており、そのため学習に集中できない場合もある。自由に教室を使うことができないなかで、工夫をしながら授業を行っていた。

次に、教員についてである。教員は、南京に仕事で来ている駐在の方や、留学に来た大学生であり、教員経験のある人はほとんどいない。その中で、試行錯誤しながら熱心に教育活動に取り組まれていた。年に一度の巡回指導だけではなく、子どもたちや先生方との交流を図り、連携していくことが必要であると強く感じた。

(2) 巡回指導の概要

上海日本人学校浦東校が行っている巡回指導の内容について。

- | | |
|----------------|-----------------------|
| 観察授業 | 補習授業校の先生方の授業を参観 |
| 師範授業 | 日本人学校浦東校の先生方の師範授業 |
| 講義や授業についての質疑応答 | 講義内容に関してはその年度に応じて異なる。 |

22年度講義内容 教材解釈の方法（算数・国語）

まず、師範授業についての注意点・工夫点について簡単にまとめてみる。

- 一時間の学習内容
 - ・読む、書くという学習活動を取り入れる。
 - ・作業や動作化を入れ、子どもが考える場面を作る。
- 教具の工夫について
 - ・黒板が使えないことを考え、簡易のホワイトボードを作成し、活用した。
 - ・字を書く際に、補助線を引き、字が書きやすいようにした。(小3)
 - ・少人数のため、黒板を利用せず付箋紙等に記入し、机やノート等を黒板代わりにして授業を進めた。(小5)
 - ・付箋を利用して、具体操作しやすいようにさせた。(小5)
- 板書の工夫
 - ・一時間の流れがわかるようにした。
- 音読の工夫

・リレー読み、ストップ読み、速読、たけのこ読み、役割を決めて読むなど、音読の仕方の提示。

○気持ちを書かせるときの工夫

・低学年は気持ちを言葉で言わせてからワークシートやノートに記入。(小1)

・高学年はワークシートやノートに書いてから発表させる。

授業を考える中で、難しかったことは、児童の実態や様子が分からない状態で授業を計画しなければならないことである。そのため、いくつかのパターンを考え、子どもの実態に応じて授業を行った。

次に、講義についてである。22年度に行ったのは国語科の教材作りについてである。南京補習授業校は、教師経験の少ない方がほとんどなので、国語科の教材を通して、教材解釈のおもしろさや授業づくりの方法を学んでもらうための場とした。内容は以下の通りである。

○クラス作り

○発表の抵抗をなくすために

○聞き方

○教材解釈

国語 小学5年 「あとかくしの雪」 木下順二 作

本教材を使って、授業の流れ、発問、教材解釈を行った。自分の考え方と他の人の考え方が違うこと、教材解釈をみんなで共有することで深まりが出ることを感じてもらった。

3. グループ学習について

日本人学校浦東校は、グループ学習を取り入れた、学びを行っていた。1クラス35人を超える児童生徒がいるため、1グループ3～4人のグループが8～9グループできる。グループ学習の良いところは、自信がない児童も、少人数なら話ができるという点である。グループ学習の中で、自分と友達の意見の違いを見つけたり、良さを感じたりすることが個の自信につながり、学習の幅が広がることを学んだ。補習授業校のような少人数の学級でもグループ学習が成り立つのかを考察した。

(1) グループ学習の意義とは

わからない子どもが「ねえ、ここどうするの?」と仲間にかける指導が原点であり、この指導が不十分で高いレベルに挑戦すると、一部の子どもだけの学びとなり、わからない子どもは切り捨てられてしまう。しかし、わからない子どもほど、仲間の援助を求めるのではなく、自力で克服しようとし、自分1人の力で苦境を脱しようとする傾向がある。そのためにも、わからない子どもが「ねえ、ここどうするの?」と仲間の援助を求めることができる学級経営や学習集団が必要なのだと考える。場面に応じて、「協同的な学び=グループ学習」を取り入れることで、個の力も集団の力も伸びると私は考えている。

(2) 学び合う関係と学習形態

協同的な学びは学び合う関係によって成立する。学び合う関係のコミュニケーションは、「ねえ、ここどうするの?」という、わからない子からの問いかけによって成立する。協同的な学びは個人個人の多様な学びのすり合わせであり、どの子も対等な立場で参加する必要がある。

学習効果を高めるには、子どもの能力・適性、興味・関心等の実態に応じたり、問題解決的な学習の各段階において、一斉学習やグループ学習、ペア学習、個別学習を適切に取り入れたりするなど、それぞれの学習活動に合った学習形態を取り入れていくことが大切である。それぞれの特徴をまとめてみる。

(○メリット ●デメリット)

一斉学習 … 話し合い活動など、集団で思考する場面で活用できる学習形態

○学習の導入部分で共通の課題を把握し、学習の終末部分で伝え合ったり、学び合ったりする場面でも効果的に

活用できる。

○多様な考えの交流により、思考の質が高まる。

●教師主導になりがちで、子ども主体の学習になりにくい。

ペア学習 … 考えを交流したり、互いの学習状況を確認めたりできる学習形態

○隣の席同士など、気軽に意見を言い合いながら、考えを広げたり、深めたりする。

○新たに他の子とペアにする場面を取り入れると、学習の広がりや深まりがさらに期待できる。

●内容が固定的になる場合がある。

個別学習 … 個別の課題や個人のペースで考えたり、活動したりすることを重視した学習形態

○子ども一人一人の能力や適性、興味・関心等、学習の理解度の差、学習スキルやスタイルなど、様々な違いに応じることができる。

○適度に対話や交流場面を設けることも大切である。

●教師一人で支援しきれない場合がある。

グループ学習 … 子どもをいくつかの小集団に分けて指導する学習形態

○子どもの興味・関心や習熟の程度、理解の状況の違い等に対応が可能である。

○話しやすい雰囲気をつくり出し、意見交流が活発になる。

○目標の実現を目指し、様々な形態の集団を編成することが大切である。

●グループの一部の子どもだけで、学習が進んでしまう心配がある。

(3) 南京補習授業校と日本人学校の比較

補習授業校

- ・人数が多い学年で3人しかいないため、1グループしかできない。グループから出た意見をつなげる場がもてない。
- ・高学年の人数が少なく、低学年の児童が多いため、グループ学習が成立しにくい。
- ・少人数指導ができる。
- ・教師主導型になってしまい、グループ学習のよさを伝える指導者がいない。
- ・授業を見合う研修の場を設ける機会をなかなかもてず、お互いのいいところを共有しにくい。



南京補習授業校の授業風景

日本人学校

- ・30～40人の児童生徒がいるため、7～10グループができる。そこで出た意見を全体の場へ戻すことができ、そこでも学習が深まる。
- ・研究体制も整っていて、教職員一人一人が実践を行う機会がある。
- ・自由に授業を見合う場が設けられている。
- ・たくさんの教員もおり、相談できる環境にある



上海日本人学校浦東校の授業風景

その中でも補習授業校の、少人数指導のメリットとデメリットを挙げてみる。

メリットは、手厚く個に応じた対応ができるという点である。一斉指導の中では難しいことも時間を取って指導することができるのはとてもいい点である。また、子どもに寄り添いながら授業ができる点は、少人数のメリットであり、週一回の授業を組み立てれば、児童の学習能力は伸びると感じた。

しかし、その少人数もデメリットになることがあると思ったのは、1名の児童に対しては、グループ活動を取り入れることができないのである。児童対教師になってしまい、児童の考えが出ないときにも、隣の子の意見を

聞いたりグループの子に相談したりすることができない。その中で教師がどのように対応すればよいのか指導の中で悩まされた。私が取った策は、教師も子どもと同じ目線になり、2人目の児童を演じるということである。具体的に述べると、小1の授業の「くじらぐも」の学習で、くじらに子どもたちがのっているときの気持ちを考えた。そのとき、「先生だったらくじらに乗っておばあちゃんに会いに行く。」とか、「くじらに乗って、きれいな海へいきたいな。」など一緒に考え、児童の考えを深めた。本来なら、子ども達同士の学びの中で、気づき、感じる部分である。しかし、1人だと自分の考えしかもてず、グループ学習が成り立たない。グループ学習を進める上で、日本人学校は多くのことが整った状況にある。それに比べ、補習授業校の場合は、グループ学習の環境が難しい状況にあるということだ。小グループで話し合ったことを、もう一度クラス全体へつなぐことで、意見を共有することが可能になる。小グループから全体へつなげることができない補習授業校では、授業中保護者の方が廊下等で待たれている。それを活用して、保護者の方へ発表したり、異学年への発表をしたりする場を設けるなどの工夫が必要であると感じた。

その中で補習校の先生方が取っていた策は、1・2年合同の生活科の学習を取り入れたり、3・4年生で合同の社会科を取り入れたりしていることだ。1・2年生の生活科の学習を観てみると、国語の時間には発言が少なかった児童も、友達同士で聞きあい、教えあいながら、作品作りをしていたのである。やはり、2人以上でないとグループ学習は成立せず、子ども同士の学びも生まれにくい環境であることが分かった。今後補習校でも、教科や単元により、腹式で学習する形態をとるのも一つの方法であるといえる。

4. まとめ

「補習授業校」という名前は聞いたことがあったが、日本人学校と変わらないものと思っていた。しかし、南京補習授業校へ行かせていただいたことで実態を知り、これからも連携を取り合い、お互いに学び合うべきだと強く感じた。3年間を通して、少しずつではあるが、連携が取れはじめている。これをシステム化し、お互いが共有できる情報をもっと増やしていかなければならない。そうすることにより、両校の教員の資質のみならず、教育にも良い影響を与えると考える。

また、グループ活動はある程度の人数がいることが子どもたちの思考を高める条件であることが分かった。今後もグループ活動を取り入れながら学び合う関係作りに取り組んでいきたい。

参考文献

佐藤 学 (2006) 『学校の挑戦学びの共同体を創る』小学館